

集中日本語中級クラスにおける演劇活動の実践報告

藤本 恭子 国際基督教大学
乾 逸子 国際基督教大学

1 はじめに

国際基督教大学日本語教育プログラム（以下、JLP）では、2018 年秋学期に JLP プログラム内の交流を促進することを目的として 2018 年 10 月 12 日に「JLP 祭」⁽¹⁾を開催し、その際、集中日本語中級コースでは、劇の出し物を行った。本稿では、その実践課程を報告したい。

近年、演劇活動を取り入れた日本語の授業における実践報告は少なくない。演劇的手法を取り入れた授業における新しい学びの発想に着目した杉山（2014）をはじめ、口頭表現力の向上を目指した宮原（2017）や、四技能を主体的に学ぶ教材として演劇活動を採用した柳田（2018）など、中上級を対象に演劇活動を取り入れた授業についての実践報告がある。もちろん言語教育において演劇活動を活用することは、それ以前にも実践され、その学習効果が報告されてきた。清末（2005）は、授業での演劇的活動を、言語事項を場面と結びつけて学習することができ、さまざまな要素を総合的に学ぶことができるものとしている。また平田（2009）は、対話を前提とする演劇を教材として用いる意味の重要性について述べている。さらに、川口（2012）では、そのような言語教育における「演劇を利用する方法」に、三つの方向性があるとしている。一つは古典劇や創作劇の登場人物を実際に学習者に演じさせてみることで、もう一つは戯曲を読解教材にしたり演劇公演の映像資料を聴解教材にしたりすること、そして最後は、「演じること」そのものに焦点を当て、それを授業に取り入れることである。本稿で述べる「演劇活動」は、最初の項目に分類される「古典劇」であるとともに、最後の「演じること」も取り入れた事例である。

本実践では、日本の昔話を讀んだ学習者らがシナリオ制作の過程や劇の練習を通してお互いに対話を重ねながら、各人の創造性を駆使してセリフを考え、実際に劇として上演するという活動を行った。以下ではその実践課程を報告し、考察を加えた上で、今後の課題を述べる。

2 コースの概要と履修学生

2-1 コースの概要

本実践が行われたのは 2018 年秋学期の集中日本語中級クラスにおいてである。このコースは 70 分授業が 15 コマと個別指導 3 コマという一週間の時間割で 10 単位となっており、JLP の「中級日本語 5」と「中級日本語 6」のコースを 1 学期間で履修する集中コースで、中級半ばから後半のコースとして位置づけされている。また、コースオフリングにはコースの目標として「上級前の段階として、中級後半の文法・表現を身につけ、抽象的、やや専門的な内容について聞いたり、読んだり、話したり、書いたりでき

るようになる」と記載されている。

2-2 履修学生

2018 年秋学期には、学部生 2 名、大学院生 1 名、短期留学生 4 名の計 7 名が当該コースを受講した。このうち 1 名は 2018 年春学期に JLP の「中級日本語 4」を履修し、1 名は 2018 年度の JLP 夏期日本語教育の C4 を履修した。他の 5 名は 2018 年秋学期より ICU で日本語コースの受講を開始した。学習者の国籍は、ドイツ人 2 名、アメリカ人 1 名、韓国人 1 名、中国人 1 名、トルコ人 1 名、ハンガリー人 1 名であった。

3 演劇活動の実践

3-1 演劇活動の題材の選択

今回の演劇活動においては題材として昔話を選んだ。選択した理由は以下の 4 点である。

1. 活動時間が限られているため、ストーリーがすでにあるものを選択すると時間が短縮できる。
2. 昔話には数多くの話があり、学生がその中から自由に選ぶことができる。
3. 通常授業では、文学的な読み物に触れる機会が限られており、今回は良い機会だと思われる。エッセイや短編小説などは教材として採用されているが、昔話を取り上げたことはない。また、他コースでも昔話を教材とすることは少なく、聴衆である他コースの学生にとっても日本文化の一端に触れる良い機会になるのではないか。
4. 一般的に昔話はストーリーがわかりやすいため、レベル差がある他コースの学習者の聴衆に理解しやすいと考えられる。

3-2 演劇活動のスケジュール

劇の活動として 7 コマを充てた。日程としては、一週間で準備をし、その週の金曜日に劇の上演というスケジュールであった。実際の活動と使用したコマの内訳、翌日までの活動（宿題）として学生に課した活動は以下の通りである。

表 1 演劇活動のスケジュール

	活動の内容	コマ数 (計7コマ)
1 日目 (月曜日)	活動の概要説明と題材の決定	1
宿題	決定した話のビデオクリップ見ることに加え、オンライン上で劇のシナリオを読み、話の理解を深める。	
2 日目 (火曜日)	シナリオ作成と配役の決定	2
宿題	全体のシナリオの見直しと自分の配役のセリフの確認	
3 日目 (水曜日)	シナリオの見直し／完成とシナリオの読み合わせ	2
宿題	セリフを覚える	
4 日目 (木曜日)	立ち稽古とリハーサル	2
宿題	セリフを覚え、自分のパフォーマンスをイメージする。	
5 日目 (金曜日)	JLP 祭における劇の発表	約 10 分

3-3 授業の流れ

3-3-1 活動の説明と題材の決定 (1 日目：1 コマ)

初日は1コマを活動の趣旨の説明と劇の選択に充てた。まず、劇の題材として上記の理由を踏まえ、昔話を取り上げることを教師側から提案したが、学生側から異論は出なかった。次に、既に知っている昔話を学生に問うと、「浦島太郎」や「桃太郎」などのタイトルが挙げられた。それらの昔話について知っている学生も知らない学生もいた。この演劇活動の初日の授業はコンピュータ教室を使用していたので、各々の学生が、それらの昔話を動画サイトなどで自由に見たり、ウェブサイトを使ったりして他の昔話の内容を調べる時間を取った。その中で、他に良いと思う話があれば、タイトルを他のクラスメートにも教え、その話を他の学生も見るように促した。その際、「舌切り雀」や「金太郎」などのタイトルが挙げられた。

既に挙げた話の内容を学生達が各自で確認した後、どの話に決めるかを話し合った。その結果、1) 話がわかりやすく面白い 2) 恐らく他のコースの学生は話の内容を知らない 3) 登場人物の数がクラスの人数に対して適当だ 4) 劇の演出上難しいと思われる場面がない という理由で「舌切り雀」に決まった。

次の日までの課題として、「舌切り雀」の動画を見ることと話の内容を簡単にまとめたウェブサイト⁽²⁾を見て、話の内容の理解を深めることを課した。話の内容の把握のためにウェブサイトを利用したのは、話を読みながらウェブ辞書などを使用して読んでもほしいからである。実際、クラスの中で劇の選択をする際、学生は様々なウェブサイト

にアクセスしていたが、ウェブ辞書を使いながらウェブサイトの内容を読んでいる学生も多かった。また、「舌切り雀」の動画⁽³⁾に関しても、最初は教師がアニメーションのものと絵本を朗読しているものを選んだが、ある学生から他の動画⁽⁴⁾が良いのではないかという声があり、他の学生にもそちらを見るように伝えた。このように、題材決定の過程において、学生も様々な面で積極的に参加することができた。

3-3-2 配役の決定とシナリオ作り（2日目：2コマ）

最初に全体で学生から提案のあった「舌切り雀」の動画⁽⁵⁾を見て、物語の流れを確認した。昔話に出てくる日本独自の文化については、学生の理解を促進するために教師が補足説明を行った。例えば、薪とは何か、なぜおじいさんは薪を拾いに行くのか、雀はどうしてのりを食べようとするのか（のりは何から作られるのか、何のために必要なのか）等の説明である。その後、学生の意見を聞きながら、物語を起承転結の4段構成にした。学生からの発言をまとめると以下ようになった。

起：おじいさんが傷ついた雀を見つけて家に連れて帰る

承：おばあさんが雀の舌を切って追出す

転：おじいさんが雀を探しに行く。宝をもらって帰ったおじいさんを羨んで、おばあさんも同じように雀の宿に押しかける

結：おばあさんが大きいつづらをもらって、開ける

次に配役を決定した。まず、配役として誰が必要かを確認した。登場人物は、おじいさん、おばあさん、雀、雀の仲間、馬を洗う人、牛を洗う人、ナレーターとなった。全員が参加するという条件のもと、各自の希望を聞いて配役を決めたが、大きな問題もなく決まった。ナレーターという客観的な役割を希望する学生、意地悪なおばあさんとそのセリフに関心を持つ学生、優しいおじいさんの役を希望する学生など、希望にはそれぞれの個性が反映されていた。次に、性別・性格（意地悪なのか、親切なのか）・どのような暮らしぶりか（どんな仕事か）等について教師が質問をして、より細かい人物設定を行った。さらに、物語全体の人間関係を図で示し、会話表現や待遇表現の必要性についても考えた。これは昔話の前提となる文化と登場人物を理解してもらうために教師主導で行った。

シナリオは、登場人物の性格や物語における役割を確認した上で、その配役となった学生が自分で考えたセリフを積極的に取り入れた。動画からセリフを聞き取りそのまま使用するのではなく、自分の持つ日本語の語彙力や知識を用いたセリフを考える方が、学生が興味を持ち、劇を主体的に考え、また覚えやすいであろうと考えたためである。

シナリオの作成過程は次の通りである。まず「舌切り雀」の動画を見ながら、前述の起承転結の場面ごとに切った。次にその場面ごとに無声で動画を見ながら、学生は自分の役になり、場面や行動、自分の気持ちを表すセリフを考えるように促した。無声にしたのは、動画で使われている表現を聞き取ることだけにこだわらず、これまで学習した表現などを活かして自分でセリフを生み出してもらうためである。初めはなかなか思い

つかない様子だったため、どのような場面か、誰と誰がどんな会話をしたか、その結果どのようなことが起きたか等の質問を教師が行った。場面や登場人物の行動を十分理解してもらった上で、自分が担う配役はどのようなセリフを言うのかを考えてもらうように心がけた。さらに、場面ごとに学生にセリフを代わるがわる言ってもらい、教師がそれをパソコン上でワードファイルに書き起こし、全員で読むことでストーリーの流れを共有した。そのように場面ごとに、「見る」→「書く」→「全員で読む」を繰り返しながら進めた。スクリプトのセリフを共有した際に、語彙や表現が他の学生にわかりにくかったり、発言した学生自身がよりの確な表現を探して悩んだりした場合は、学生同士が話し合ったり、必要に応じて教師からアドバイスを言ったりしてコミュニケーション活動の活性化を行った。最後に、作成したスクリプトを使用して自分の配役のセリフを発音に注意しながら一度通して読んだ。次の日までの課題として、シナリオの全体的な見直しと自分の配役のセリフの確認を課した。

シナリオ作りの過程では、学生が自分自身で日本語のセリフを考えるという点を重視すると共に、考えたセリフを全員で共有し、他の学生と日本語の語彙や表現に関して積極的にコミュニケーションを図るという機会を持たせることにも留意した。その結果、配役の個性などを強調したオリジナルのシナリオができあがった。

3-3-3 シナリオの見直し / 完成とシナリオの読み合わせ (3日目: 2コマ)

前日の課題が自分のセリフを見直すということであったため、三日目はシナリオの見直しから始めた。また、この日の担当教師は二日目の担当教師とは違ったため、新しい視点でシナリオの見直しを行った。シナリオの見直しにおいては、1) 初級の学生が聞いてもわかりやすい言葉や表現であるか (例えば、「めしをわけてやる」を「ごはんをあげる」に変えるなど)、2) できるだけ日常的な挨拶の言葉を入れる (例えば、「いただきます」「ただいま」など)、3) 上級の学生でも聞いただけではわからないような言葉はわかりやすい言葉に置き換える (例えば、「薪」を「木」とするなど) という点を念頭に置き進めた。この作業は、学生から見直しの案はなかなか挙がらなかったため、教師主導の形で進めた。学生が表現や言葉の難易度を判断したり、「薪」のような言葉を他の言葉に置き換えたりするのは困難だと思われることも教師主導の形で進めた理由である。

このような過程を経てシナリオを完成させ、訂正後の完成版のシナリオを全員に配布し、読み合わせを始めた。読み合わせをしながらも、訂正した方がいいと思われる箇所は随時訂正を加えた。前日からの課題として自分のセリフを確認しておくことがあったため、スムーズに読める学生もいたが、あまりセリフが頭に入っていない学生もあり、その点にはばらつきが見られた。また、学生がセリフを読む際にアクセントやイントネーションが間違っている場合は、この時点で指導を加えた。

さらに、小道具としてどのような物が必要かを主に学生達に考えさせた。今回は時間が限られており、学生達が小道具等を制作する時間はないため、自分たちで準備できるものは準備し、その他のものは教師が準備することとした。学生からは「雀の羽は私が持っているブランケットを使えばいい」、「牛は私が持っているぬいぐるみが牛みたい

見えるから、明日持ってくる」というような声が上がった。教師は配役のお面、おにぎりやお碗、そして、葛籠のような箱を次の日までに用意することとした。

学生には、次の日までの課題としてできるだけ自分のセリフを覚えることを課した。

3-3-4 立ち稽古とリハーサル (4日目:2コマ)

この日は発表の前日であったため、授業の冒頭から立ち稽古を始めた。立ち稽古は通常の教室でスペースを作り行った。短いスケジュールの中で、セリフが覚えられるのかという懸念が教師にはあったが、立ち稽古を開始したときから、ナレーター役の学生を除きシナリオを手にして練習を始める学生はいなかった。

練習の最初はシナリオに沿って劇を進めるスタイルとした。各自のセリフの発音、アクセント、イントネーション等に問題がある場合は、教師がその度指導した。また、セリフを言う中で、言いにくいものやもっと適切な表現があった場合は、その都度教師が訂正し、学生達はメモを取って新しいセリフを覚えた。最初の2、3回の立ち稽古では、劇を進める中で、誰がどのように登場するか、小道具をどのように使えば効果的か、特定の場面ではどのような立ち振る舞いをすべきか等も話し合いながら、練習を進めた。例えば、おじいさんが雀と出会うシーンで、お弁当を食べるときに風呂敷包みをほどいておにぎりを出すよりも、おにぎりそのものをポケットから出すほうがスムーズに話が進み、聴衆にもわかりやすいのではないか、というような話し合いが学生の中で行われた。また、妖怪たちがおばあさんを脅かすシーンも、妖怪たちがどのように動けばより効果的かというような話し合いが行われ、幾つかの動きのパターンを学生達が試したり、それを見た他の学生が「こうしたほうがいいのではないか」などと言ったりして、劇中における最終的な動きを決めた。

何度か上記のような練習を繰り返した後で、「リハーサル」と称し教師が途中で止めるような指導を入れることもなく通し稽古を行った。「リハーサル」を始める前には学生の中から、「もっと大きな声を出そう」などという声も自然に上がった。「リハーサル」を3度ほど繰り返した後で、「おそろくもう大丈夫だ」という声が学生から出て、練習を終えることにした。複数の学生から実際のステージで練習したいという要望があったが、実際のステージは当日でないと使用できなかったため、事前に練習はできなかった。この点は学生に不安を残したかもしれない。

翌日が劇の発表の日であったため、その日は課題として、劇当日をイメージし、セリフを覚えることを課したが、ナレーターを除き、セリフを覚えていない学生はいなかった。

3-4 劇の発表

当日は、「JLP 祭」の日程に沿って、午前の部の第二部の後半、約10分の発表となった。配役などのクラス紹介のスライドは教師が用意したが、ステージ上でのクラスの紹介、劇の発表、そして劇後のクラス全体での挨拶などは、すべて学生達が主体的に行った。

劇は10分弱の発表であった。大きな失敗もなく、学生がセリフを忘れたり、覚えていなかったというようなこともなかった。ただ、2本のスタンドマイクが舞台中央にあっ

たものの、演者の声が聴衆まで聞こえづらいこともあった。これは、実際の舞台が大学の食堂の特設ステージで、今まで練習を重ねていた教室とではスペース上に大きな違いがあり、実際にどの程度の声を出せばいいのか一度も実践練習ができなかったためだと思われる。

4 学生アンケートの結果

劇の活動後、学生に対し事後アンケート（添付資料1）を実施した。アンケートは無記名で、質問は日本語で行い、記入は日本語でも英語でも可としたが、英語で記入した学生はいなかった。アンケートの結果は概ね劇の活動に対して好意的であった。以下、項目別に見ていきたい。

まず、集中日本語中級のクラスだけが劇の発表をしたことに関しては、否定的な見方をしている学生は一人もいなかった。他のクラスが個人発表やポスター発表などの異なる形式の発表をしていたことと比較し、自分達のクラスは劇でよかったという声が多く見られた。また、「他のクラスも劇をすればよかったのではないか」という、劇の活動に対して肯定的な意見もあった。さらに、劇をやってみると、「そんなに難しくなかったし、日本語を積極的に使うのはおもしろかった」という意見もあった。

劇の題材については、「自分達で劇を作った方が楽しかったのではないか」という意見の学生も1名いたが、その他の学生から昔話を劇の題材に選んだことに対する異論は聞かれなかった。また、昔話の選定方法については、全員でビデオを見た上で話し合って決めたのでよかった、それで問題なかった、という意見がある一方で、もっと話し合いが必要だと思ったという意見や、学生は昔話の知識が乏しいので、先生が決めた方がよかったという声もあった。

スクリプトの作成方法に関しては、配役を決めた上で、自分のセリフを考えたことが良かったという声が大多数を占めた。その方が速くスクリプトを完成させることに役立った上に、自分で考えたセリフなので覚えやすかったという学生が数名いた。また、最初は動画サイトで使われているスクリプトをそのまま使えばいいと思ったが、自分達で作ってみると面白かった、という学生もいた。

劇の練習方法については、様々な意見を述べていた。全体的な意見として、皆でアドバイスをしあったのがよかったという声が多く、「みんながんばりました。先生達も同じく」といった声もあった。時間に関しては、1名がもう少し練習の時間が必要だったのではないかと答え、他の複数の学生はもっと演技に力を入れればよかったと言っていた。また、できればステージで一度は練習したかった、という声もあった。

当日の発表に対しては、「言いたいことがないです。よかったです。」という意見がある一方で、3名の学生が声の大きさについて言及し、もっと大きな声で話せばよかったと答えていた。

活動全般に関しては、「始めはなぜこれをしなければならないのかと思った時もありましたが、あとになるとたのしくやりました。」という率直な意見も聞かれ、一様に活動は「楽しかった」と答えていた。しかし、この活動が日本語学習に役立つかという点については、役立つと思う学生もそうではないという学生もいた。「役立つ」と答えた

学生は、言葉の練習になった、自由に話す練習になった、とその理由を挙げていた。

5 考察

JLP 祭において集中日本語中級クラスでは劇の活動に取り組んだが、初めての試みということもあり、当初は教師側も学生もその活動のやり方やスケジュールなどをどう進めるべきか確信が持てないまま手探りの状況で活動を始めたのが現状であった。しかし、当日の劇の様子や取り組み過程における学生の反応、そして事後のアンケート結果を見る限り、概ね良い結果が得られたのではないと思われる。以下、幾つかの点において今回の活動を振り返ってみたい。

まず、劇の題材を昔話にした点であるが、これは結果としてよかったのではないかとと思われる。今回の活動は時間が非常に限られた活動であったため、既にストーリーがあるものを選んだことで、シナリオ作りをスムーズに進めることができた。また、昔話は子供向けのウェブ資料（デジタル絵本、アニメーション、話の内容を紹介したウェブサイト等）が豊富で、それらを利用することによって、学生が中心となってどの話にするか選ぶことができた。学生の事後アンケートでも、自分達で選べてよかったと答える学生もいて、活動の始めの部分から学生が主体的に関わることができたのは、活動に対する動議付けにも役立ったのではないかと考えられる。3 項で挙げた聴衆に対する利点に関しては、今回は聴衆に対する調査は行っていないため、明言はできないが、劇当日の聴衆の反応からは、劇の内容を理解し、楽しんでいる様子が伺えた。今後は聴衆に対しても何らかの振り返りが得られるような方法を模索したい。

次に、シナリオ作成に関してであるが、前述の通り自分で自由にセリフを考えるという方法を選択した結果、学生がこれまでに学んだ自らの日本語の知識を活かし、自分の考えを日本語で表現するという活動を活性化することができたのではないと思われる。しかし、自分なりの表現活動がすぐにできる学生がいる一方で、昔話という架空の世界において自分自身の日本語能力を表現活動に結び付けることがなかなかできない学生もあり、限られた時間の中で、学生それぞれの表現力を十分に引き出すことには難しさもあった。この点に関してはさらに工夫を重ねたい。

シナリオ作成という点においては、その制作に2名の教師が関わることは結果的に良い効果を生んだかもしれない。一人の教師が2コマという短く限られた時間の中で学生達の声聞きながら作り上げたシナリオを、次の日に別の教師が主に言語的視点を中心に見直したことによって、よりわかりやすく、また覚えやすいシナリオにすることができたのではないかと考えられる。また、覚えやすいという点から考えると、配役を決めた上で自分のセリフを自分で考えるという方法は効果的であったと思われる。実際、セリフを覚える早さは教師の期待以上であった。最終的なシナリオが完成した次の日に立ち稽古を始めた際、教師は当初シナリオを見ながらの稽古となるものと考えていたが、学生達はナレーター役を除き、シナリオを手になく練習を始めることができた。特に主要人物であった2名の学生のセリフは簡単に覚えられるものではないと予想したが、二人とも「覚えることは困難ではなかった」と話している。またこの点に関しては、事後アンケートからも学生が自分達でシナリオを作り上げたことに

対して好意的な評価をしていることもわかった。

さらに、劇の練習活動に関してであるが、まず特筆すべき点は、学生達が非常に積極的に劇の練習に関わっていたことである。前述の通り、シナリオを覚えるのも早く、練習の際も、自分達で意見を出し合ったり励ますような言葉を練習の最中に発する姿も見られた。リハーサルにおいては、発音やイントネーションの指導、より適切なセリフへの変更など言語面に関する点では教師主導で行うこと多かったが、劇の進行については、教師が指導をする前に学生達の方からアイデアを出す姿が多く見られた。これはクラスの雰囲気が寄与するところも大きいと考えられる。このクラスは7名という比較的小さなクラスで、集中コースということもあり、週5日毎日3コマを同じ教室で学んでいる。また、クラスで読解教材について互いの意見を交換しあうことも日常的に行っていた。そのような土壤が、この演劇活動においても練習の際に劇の進行について自由に意見を出し合うという結果をもたらしたのかもしれない。この皆でアドバイスをし合う行為によって、学生の活動に対する満足度が高まっていることがアンケート結果からも窺える。一方、教師側としては、学生の個性の尊重と演技指導という面で難しさを感じた。それぞれの役の学生は自分なりのイメージや自分の個性を活かしながら、自分のセリフを考えたり、演じたりしていたが、それをどこまでセリフとして訂正したり、「演技指導」するかは、教師の判断に委ねられた。学生の個性を尊重したいと思う一方で、教師の中には、「昔話」に登場する「おじいさん」や「おばあさん」には一定のイメージがあり、そこから大きく逸脱するようであれば、教師が持つイメージにより近いものとなるように「指導する」という形を取った。これは「日本の昔話」として劇を見る学習者である聴衆を意識してのことでもあった。この点は時間が許せば、学生達と議論すべき課題かもしれない。

6 まとめと今後の課題

以上、JLP 祭における演劇の実践活動について述べた。手探り状態で始めた活動であったが、非常に有意義な結果となったのではないと思われる。杉山 (2014) は、演劇的手法を体験して、協働でアクティビティを行うことの楽しさを実感し、コミュニケーション活動を活性化することの可能性について述べているが、本実践でも、演劇という一つの目標に向けて、学生達が主体的にお互いのセリフを聞いたり考えたりしながら楽しみ、コミュニケーション活動を活性化できた過程が確認できた。また、中山 (2012) は、個人タスクと違ってグループで一つのものを作っていくというプロセスにおいては、成果物は自己と他者の共有物であり、その制作過程でより深いコミュニケーションを経験するとしているが、今回の活動を通して、学生達は一つの成果物を目標に主体的に劇に取り組み、その活動自体を好意的に捉えていた。学生アンケートの結果にも、それを示す学生の発言が散見される。さらに、川口 (2012) は、演劇活動をすでに文芸活動として完成されたものを使用するものと、学生に創作劇を書かせてそれを演じさせるものとに分け、後者の意義として、学習者は演劇活動を通じて日本語の学習項目の意味や機能を見つけ出し、それがどのように使われるかを体験し、主体的に習得するという点を挙げているが、本実践は、前者の例—昔話を用いる—でありながら、自分達でセリフを

考えるという手法―後者の例―を取った混合形式と言えよう。その中で、後者の意義を確認できたのではないだろうか。

一方で、課題も残った。まず、評価の点である。今回は「JLP 祭」の活動の一環であったため、評価は参加点という形で与えたが、果たしてそれが妥当であったかは疑問が残る。学生は概ね積極的に活動に参加していたものの、その度合いには差がみられた。このような活動に対して評価を行う場合は、事前に明確な評価基準を学生に示す必要があるだろう。また、事後アンケートでこの活動に対して日本語学習に「役立つ」とは言えないと評価した学生もいた。この事実は、活動の過程や方法に再考の余地があることを示唆していると言えるだろう。日本語学習の授業の一環としてこのような活動を実施する際には、どうすれば日本語学習に「役立つ」活動になるのか、さらに探る必要がある。

今回は1週間という限られた中での活動となったが、またこのような機会があれば、本実践の成果と反省点を踏まえ、より効果的な活動を行っていきたい。

注

1. JLP 祭についての詳細は本稿と同じく『ICU 日本語研究』第 15 号に掲載予定のため、そちらを参照されたい。
2. 話の内容理解のために使用したウェブサイト：
福娘童話集「したきりすずめ」<http://hukumusume.com/douwa/betu/jap/09/01.htm>
(2019 年 1 月 8 日参照)
3. 教師が紹介したウェブ動画：
 - ① ch thin thin「まんが日本昔ばなし 舌切り雀」
https://www.youtube.com/watch?v=kLLjLl_WqmQ (2019 年 1 月 8 日参照)
 - ② KidsTube「したきりすずめ」
<https://www.youtube.com/watch?v=q4WUXGa3Rrk> (2019 年 1 月 8 日参照)
4. 学生が選んだウェブ動画：
キッズボンボン TV「したきりすずめ」
https://www.youtube.com/watch?v=7_0QsnXF99Q (2019 年 1 月 8 日参照)
5. 以下の「動画」は注 4 と同じ動画を指す。

参考文献

- 川口義一 (2012) 「第 2 章 文脈化で学ぶ文法：日本語教育における『演じること』の意味」『ドラマチック日本語コミュニケーション「演劇で学ぶ日本語」リソースブック』(pp.59-77) ココ出版
- 清末逸子 (2005) 「演劇的活動を取り入れた日本語学習：ドラマ作りと即興演劇的活動を取り入れた会話授業の実践を通して」『横浜国大言語研究』23, 48-38.
- 杉山ますよ (2014) 「演劇的手法を取り入れた活動の可能性」『日本語教育実践研究フォーラム報告 WEB 版』(2018 年 12 月 4 日参照)
- 中山由佳 (2012) 「ひととものをつくる―演劇作品作りの現場としての日本語の教室から―」『早稲田大学日本語教育実践研究 刊行記念号』107-118

- 平田オリザ (2012) 「第 3 章 劇作家から見た日本語教育の課題と展望」『ドラマチック日本語コミュニケーション「演劇で学ぶ日本語」リソースブック』(pp.78-101) ココ出版
- 宮原温子 (2017) 「中級クラス口頭表現演習における演劇活動の報告」『日本語教育方法研究会誌』 23-2, 18-19.
- 柳田しのぶ (2018) 「＜実践報告＞演劇の製作と上演「制作日本語Ⅱ」:コース設定、コース運営を中心に」『筑波大学グローバルコミュニケーション教育センター日本語論集』 33, 93-102.

資料 1

集中日本語中級

2018 年秋学期

JLP 祭^{まつり}のふりかえり

* JLP 祭はどうでしたか。JLP 祭について色々教えてください。

<注>ここに書いたことは成績には全く関係ありません。良いことも悪いことも、
思ったこと、感じたこと、何でも書いてくれるとうれしいです。

1. クラスの出し物について

1) JLP 祭のためのクラス活動はどうでしたか。全体的な感想を教えてください。

2) 次の点について、よかったと思う点や、もっとこうした方がよかったと思う点を
教えてください。先生にこうしてほしかった、クラスメートにこうしてほしかった
等もあったら書いてください。

① どの昔話にするかの決め方

② スクリプトの作り方

③ 劇の練習の仕方

④ 当日の発表

3) 今回の活動は楽しかったですか。日本語の学習に役に立つと思いますか。
どうしてですか。

4) 今回は出し物として昔話の劇^{げき}(play)をしました。これでよかったと思いますか。
他のもののの方がよかったですか。どうしてですか。

5) その他、何でも思うことがあったら、書いてください。

ご協力ありがとうございました！